

国語

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

十三歳の水野利恵は幼くして母を亡くし、祖母に育てられた。祖母の死後は、鎌倉に住む女性に引き取られた。一方、利恵の父は、妻に死なれたあと自堕落な生活を送るようになり、別の女性と東京の下町に暮らしていた。ある日、利恵は、鎌倉の家を出、その町に出かける。

知らない町には、知らない町のおいがある。ひとりひとりの顔がちがうように、それぞれの町には、それぞれのにおいがある。国鉄総武線の小岩駅の前に立ったとき、利恵はそうおもった。むんむんする日ざしの照りかえった駅前広場を、何台ものバスが息ぎれをしながらゆききしている。

① 人いきれではちきれそうなパチンコ屋、大安売りの衣料店、焼鳥屋やきとりやにラーメン屋、そしてまたパチンコ屋。

利恵は、この町はあずきのにえたつときのおいとする——とおもう。② ナベをあけたとき、ふうわあーと顔にふりかかってくる、あの暑くるしくって、それでいてなつかしいにおい。

わたしのいま住んでいる鎌倉の町は、まつたけのすいものにおい。そういえば、あの人もそんなにおい。あの人は、いまごろ、わたしがあずきのにおいにする町を歩いているなんて、おもいもよらないだろう。利恵はそうおもうと、うれしくなった。

「えー、いらっしやい。いらっしやい。栄養満点だよ。夏はこれにかぎるよ」

パチパチとしぶうちわをたたきながら、屋台でモツの串焼きを売っている。

「二本ちょうだい」

利恵は三十円を台においた。ふと目のふちにカーテンのひだのようなゆれを感じた。ふりむくと、そこに空色のパラソルがあった。白い水玉模様のパラソル。柄からぶらさがった紙に、黒いマジックペンで「ワスレモノ」と書いてあった。

「わあー、ずっと持ってたわっているの？　これ」

利恵はモツを口に入れながらいった。

「なかなか犯人はみつからないもんだよ」

「やだあー。犯人だなんてエー」

③ふたりは顔をみあわせて笑った。ひさしぶりに立ったまま食べるモツ焼きの味。こうやって食べるときの、たまらないほどおいしい味をあの人には知らないんだなあ——。利恵は鎌倉の家のあの人をおもいうかべた。いまも机の前に正座して、分厚い外国の本を読んでいるのだろう。すだれの細い縞が、たたみに影をおとしている、ひっそりとしたあの人の部屋。仏像がすわっているような、動かない後ろ姿。

駅前通りは、先へ進むにつれて、少しずつ色あせて活気がなくなってくる。自転車修理屋、④ザツカ屋、時計屋——。

（この町はいいなあー。この町にびったりした人だといんだけどなあ——これからわたしのあう人が——）

利恵は貸衣装店の前で⑤A ウインドーをみた。ウインドーの中には、ズボンや背広がたくさんさがり、たなばたのたんざくのように、赤や白の商札がゆれている。利恵の目はそれをみたのではなく、ウインドーにうつる自分の姿に目をやった。

（水野利恵か——十三歳）

（美人じゃないけど、ブスでもないな。といってかわいらしいってところがぜんぜんない——これは致命傷ですな）⑤

（せめて、もうすこし鼻にあいきようがあり、目じりでもさがっていたら、よかったんだけど）

（これから、わたしのあいにゆく人——その人は、どんな目でわたしをみるかしら）

（わたしは、玄関をあける。その人はこっちをみる。わたしをみて、にっこり笑う——）

そうなければいいのだけれど。わたしは、その人を⑥B みつめて、大きな声でいうのだ。

（ここの子どもになりにきたの）

三味線の音がきこえてきた。つづいて太鼓に鐘の音。チンドン屋がこっちへむかってやってくる。先頭の女の人の持つのぼりが

はたはた風になびいている。列はしだいにこちらへ近づいてくる。ぞろぞろとそのあとを子どもがつづいていた。

のぼりを持った女の人のあとが日本髪を結った三味線ひき、そのあとがチョンマゲをつけた太鼓と鐘をならす男の人。三人は背中に「本日開店 さかえスーパーマーケット」という紙をはっている。

のぼりを持った女の人は、道ばたの見物人のすぐ近くまでやってきては、ひょいとあごをつきだして、おどけてみせる。白いえのぐをぬったようなおしろいが、目じりのところでひびわれていた。汗が顔からふきだしている。

おどけるようすがおかしいので、見物人たちは笑った。利恵も笑った。それがうれしくてたまらないように、女の方は、なおもいきおいよく、のぼりをふりつづける。そのたびにお乳のあたりが大きくゆれた。利恵はたまらなく、その女の方がすきになった。あとのふたりは、はでな衣装をつけていたが、その人は白地に紺の線のはいったゆかたを着ていた。かつらはつけていない。

（わたしがこれからあいにゆく人、その人が、ああいう人だといいな。そうだと、うれしいな）

そのとき、利恵のそばまできた女の方は、利恵にむかって、ひょいとあごをつきだした。利恵も、おもわず顔をしゃくりあげ、声をあげて笑った。

「あれ、ほんとうのニンゲン？」

利恵のそばにいた女の子が母親をみあげていった。

「あら、この子ったら……」

母親は大きな口をあけて笑った。まわりの人たちもさそわれて笑った。利恵はそんな空気が氣にくわない。

「ばかねえ。よくみなさいよ。人間にきまっているじゃないの」

利恵はおもわず大きな声をあげた。いっせいにみな利恵のほうをみたので、利恵は C すましてその場をはなれた。

チンドン屋の音は、しだいに遠くなった。

利恵は、とうふ屋と靴の修理屋の間をはいった。路地に足をふみ入れると、こもった空気が D ふりかかってくる。ビー玉や、ぬり絵や駄菓子売っている店のとなりに、利恵のさがしていた家があった。「パーマ」と小さな立 ^{たて} E ^⑩ カンバンがでていた。利恵

はその前に立って深呼吸をした。ドアはあけっぱなしになっていて、何回もせんたくをしたらしいちぢんだ白いレースのカーテンがゆれている。

利恵はカーテンをあけた。店の中にはだれもない。黒ずんだ板の間に、ドライヤーが一台と、あとは鏡といすだけの小さなパーマ屋だった。板の間は古びていたが、よくふきそうじをするらしくつやつやしていた。トタン屋根なので、外にいるよりもむしろ暑い。^⑪三毛猫がうさんくさそうに利恵をみあげた。

「こんにちはー」

利恵は、せいっぱい声をはりあげた。だがでた声はかすれている。ひょいと部屋のすみから女の人が顔をだした。そこはくぼんでいたので、人のいるのが利恵のところからではわからなかった。

「カット？」

女の方は利恵の前に立った。その人は、あののぼりを持ったチンドン屋の女の人と似てふとっていた。口もとの感じも似ている。白い上っぱりを着ていて、それが汗でよごれないように、衿えりのところに白いタオルがかけてあった。

「――」

「なんの用？」

だまつている利恵を、^⑫けげんそうにみながら、手もとの扇風機をカチツととめた。

「カットじゃないんです。わたし水野利恵です」

「みずのりえ？」

「ええ。水野利恵です。ここの家の子になりたいんです」

利恵は足をふんばると、声をはりあげるようにしていった。いうだけいえばいいのだ。どうせだめにきまつているのだから――。
「やーだ。これどういうことでしょ」

女の方はとつぜん笑った。笑うといっそうチンドン屋の女の人と似る。目もとにしわができると、この人はとくにやさしくみえ

るわ、ふと利恵はそうおもった。

「ちよつと、あんた、お客さんですよ」

利恵はおもわず体をのりだした。

「よばないで。わたし、あなたにそれをいいにきたんです。あなたに」

「――?――」

びつくりした目でその人が利恵をみたとき、もう奥からステコ姿の男の人が顔をだした。

「よおー、利恵じゃないか。よくここがわかったなあ。さあ、さあ、あがれ」

酒のにおいが鼻についた。

「ちよつとまつて。あんた、この子だあれ?」

「だれつて、きまつているじゃないか。おれの子だよ。このおれさまの子ですよ。かわいいだろう。ずいぶん大きくなりやがつて」

「ほうりっぱなしにして、大きくなりやがったもないでしょう。ほんとうにあきれた」

利恵のほうをみて笑いながら、その人はいった。だがすぐに声をはりあげた。

「ウソをついていたのね、あんた」

「ウソなんかつか。いわなかっただけじゃないか」

「それがウソよ」

利恵は前をむいたまま、そつとカーテンをあけると外へでた。そして足早に路地を通りぬけた。

知らない町で、知らない町のおいをかいだ。そして知らない人にあつた――それでいいのだわ。きたかいがあつた。わたしは、¹³やりたいとおもったことをやったのだもの――。

もう一度あの屋台の焼鳥屋でモツの串焼きを食べて、鎌倉¹⁴のあの人の家にかえろう。

あずきのにえたつようなにおいのするこの町に、もうくることもないだろうと、利恵は大きく息をすいこんだ。

(注) 国鉄⇨日本国有鉄道の略称。一九四九年に設立され、一九八七年の分割・民営化により現在のＪＲとなった。

〔問一〕問十については、マークシートの所定の欄に記入しなさい。問十一・問十二については、記述式解答用紙の所定の欄に記入しなさい。〕

問一 ☐ A B C Dに入る最も適当な語句を、それぞれ次の中から選び、その番号をマークしなさい。(同じ番号を二度以上選ばないこと。)

- | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|-----|---|------|
| 1 | じつと | 2 | むっと | 3 | つんと | 4 | ちらりと |
|---|-----|---|-----|---|-----|---|------|

問二 傍線①「人いきれ」の意味として、最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 大勢の人の声や物音で騒がしく、せわしいこと
- 2 草の茂みの湿気で、むしむしすること
- 3 大勢の人でにぎわい、商売が繁盛すること
- 4 たくさんの方の熱気で、むんむんすること

問三 傍線③「ふたりは顔をみあわせて笑った」とあるが、焼鳥屋のどのような点に笑ったのか、その説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 パラソルの持ち主はきつと現れるという焼鳥屋の粘り強さ
- 2 パラソルの持ち主を大げさに「犯人」と呼ぶ焼鳥屋のいい加減な態度
- 3 たまらなくおいしいモツ焼きをつくる焼鳥屋のひたむきさ
- 4 持ち主が現れることにこだわらず、忘れ物を持ってまわる焼鳥屋の大らかな態度

問四 傍線⑤「致命」と熟語の構成が異なるものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 投球
- 2 去就
- 3 配膳
- 4 懲悪

問五 傍線⑦「はでな」の品詞として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 連体詞
- 2 副詞
- 3 形容詞
- 4 形容動詞

問六 傍線⑨「利恵はそんな空気が気に入くわない」とあるが、利恵はなぜそう思ったのか、その説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 母親が子どもの言葉をほほ笑ましく受け止めていたから。
- 2 まわりの人たちがチンドン屋の女性の苦労も理解せずに、喜んで笑っていたから。
- 3 母親とまわりの人たちがチンドン屋の女性をあなどるように笑っていたから。
- 4 母親もまわりの人たちもチンドン屋のことを軽く受け流して笑っていたから。

問七 傍線⑪「三毛猫がうさんくさそうに利恵をみあげた」とあるが、利恵のどのような心情を表しているか、その説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 三毛猫にも不審な目で見られているような気持ち
- 2 三毛猫にさえばかにされているような気持ち
- 3 三毛猫にもわずらわしい目で見られているような気持ち
- 4 三毛猫にさえ信頼されているような気持ち

問八 傍線⑫「けげんそうにみながら、手もとの扇風機をカチツととめた」とあるが、その理由の説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 女の子が何を目的に來たのか話さないの、そのわけをすぐに言わせようとしたため。
- 2 何も言わない女の子の態度を怪しく思い、急いで追い返そうとしたため。
- 3 女の子が何をしに來たのか事情がよくつかめず、しっかりと話を聞こうとしたため。
- 4 黙っている女の子をかわいそうに思い、家の中に入れてあげようとしたため。

問九 本文の表現に関する説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 語り手は三人称の視点をとり、利恵、チンドン屋の女の人、パーマ屋の女の人視点から事物を捉え、三人の心の動きを捉えている。

- 2 この作品は一人称の「わたし」で語られ、登場人物の利恵が語り手である。

- 3 街の様子や情景を表すために、食べ物のおいなど、嗅覚きゅうかくでとらえた表現が使われている。

- 4 心の声、内的独白がすべて丸括弧に入れて表され、主人公の利恵の様々な揺れる複雑な思いが描かれている。

問十 傍線⑭「あの人」とあるが、利恵にとってどのような人物か、その説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 庶民的でユーモアがあり、だれとも打ち解ける気さくな人物
- 2 学問に打ち込み暗がりでひっそりと暮らす、風変わりな人物
- 3 俗世間との交渉を断ち、日本の歴史や文学を探求する高潔な人物
- 4 教養の世界に生き、無表情で人を寄せ付けない、厳格な人物

問十一 傍線⑬「やりたいとおもったこと」とは何か、利恵のせりふを用いて、三十五字以内でまとめなさい。(句読点、符号も字数に含める。)

問十二 傍線②④⑥⑧⑩のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。文字は大きく鮮明に書きなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

いずれにせよ、定家^(注1)は一代の新しい歌の水先案内人としての役割をリッパに果たした人であり、同時にそれ以後長い生涯を通じて、学術的な意味でも大変な功績のあった人であると言えます。その場合に、彼の位置というか、彼の仕事の意味のいちばん大きなところは何か、僕が感じていることを言いますと、彼は平安時代の歌のひとつの理想に対して、はつきりとある面ではA⁽²⁾を打っている。そして別の面では、新しい歌のスタイルの素晴らしさを鮮やかに示した人だと思う。平安朝の歌は誰をもって理想とするかという点と、やはり紀貫之^(注2)、言いかえると『古今和歌集』です。『古今集』というのは平安時代の初期に発して、勅撰^(注3)和歌集では第一冊目です。その美学に対して、藤原定家は「もうこれはおしまいにしよう」と言った。そこが非常に鮮やかです。

じつは、それはお父さんの俊成のやったことをある意味では受け継いだのですが、それをはっきりと言いきったのが定家だったわけです。どういうことかという点と、定家の『近代秀歌』という短い歌論があります。この文章は短いのですが、引用した歌がたくさんあります。なぜそういうふうになったかという点と、それは先ほど言ったように源実朝^(注3)に教えるために「こういう歌がB⁽⁴⁾な歌です」とたくさんさんの名歌を挙げた。だから、もともとC⁽⁴⁾な部分は非常に少ない。そこでは本当に有用なことを言っていて、「昔、貫之、歌の心巧みに、たけ及び難く、詞強く、姿おもしろきさまを好みて、余情妖艶の軀^(注4)をよまず」と言いましたが、ここが非常に大事です。

これがある現代語訳（藤平春男）で言うと、「昔、紀貫之は、歌の趣向の立て方が巧妙で、声調の張りがずば抜けてすぐれ、詞のあらわす意味が明確で、従って一首全体から趣向のおもしろみを感じられてくる、という歌いぶりを好んで、余情妖艶の歌風を捨てました」。別の現代語訳（久松潜一）を見ると「昔、貫之は歌の知的内容が巧みで、品位のあることはヒルイなく、詞が強く趣向に優れている姿の歌を好んだが、余情妖艶の体が欠けている」と言っていて、久松訳のほうがさっぱりしています。要するに、「昔、紀貫之は作歌の心得という点で言うと、歌全体の作り方が巧妙で、位が高く調べもぴんと張っている上、意味がはっきりし

ていて、こういう観点から作ったという趣向の見所がある、という歌を好んだ。その反面、ことばが明示している向こうに暗示されるものを重んじたり、妖しく艶っぽいという歌風は捨てた」ということ、それが紀貫之の生き方だったと言っています。それはまさにそうだった。

たとえば、屏風歌を作る場合などにはそれが見事にハッキリされています。屏風の絵を見て、そこに男や女が描かれていてなにをしている、池があつて美しい花が咲いているとか、そういう場合にはそれをそのままぱつととらえてきて、そこに趣向の面白さ、つまりその女が今どういふに何を言っているかということまで考えて、想像力をクシして書くわけです。それははじめから終わりまできちつと書く。そういうものが平安時代を通じてずっと理想的だった。

ところが、それがどうもそうではなくなってくる。それはいつくらいからかというと、人の名前でいうと藤原俊成のときに違ってくる。俊成はここで「幽玄」^⑧という言葉を使いました。幽玄という概念は、もともとは非常に深く暗いもののことを言います。

俊成はその言葉で中国の言葉から持ってきた。もともとは哲学的な奥深いことを言うときに幽玄と言ったのですが、美学、美意識に転じたのは俊成の大きな功績です。はるか後の現代画家の岡田謙三さんが、ユーゲニズムということを言つて戦後アメリカでたいへん売れた。それぐらい幽玄という言葉は現代まで生きています。要するに幽玄とは、貫之がはつきりしたことばにして言ったのに対して、ことばで言う以外にその余情を非常に重んじたということです。それをもうひとつ時代が下がった定家は、俊成が幽玄と言ったものを「余情妖艶」と言った。それはつまり、俊成の幽玄をもう少し華やかに、そしてもっと理論的にも明確にしているわけです。俊成の幽玄はどういうふうにも解釈できるけれど、定家は「余情」と「妖艶」と言った。それは、理論家としての定家ののはつきりしているところです。「余情」はヨセイとよみました。現代にはもちろんヨジョウ。

つまり、貫之たちの生き方というのは、屏風歌に適しているといえは適していた。ということは、言いかえるとかつちりとひとつのイメージなり感情なりを言いきっている。なおかつ、そこにふわとした広がりがある。それが素晴らしかった。貫之はそういう歌では名人だった。この貫之のいいものになると、他の連中が及びもつかないくらい明確で大らかな歌を作った。それに、貫之的な歌というのは社交に非常に役に立つ。社交の最たるものは宮廷における宴会です。そのようなところで、「すごいな、いい歌

だな」といわれるのは誰にも分かる明確な歌です。つまり、貫之のそういう理想というのは、やはり平安時代初期から中期にかけて台頭してくる貴族階級の意気込みが見事にそこに表れていたのです。宮中の宴会などでもすぐにお互いに分かり合うような歌を歌い合って、それがひとつの文学的エネルギーになって、やがて百年近く経った後、紫式部(注4)とか清少納言とか和泉式部とか赤染衛門もんとかを生み出してくるだけの宮廷全体の文化的なエネルギーを生み出した。それはやはり、お互いに付き合いがあつてできたことです。

ところが、三百年近く経って平安朝が終わってしまう。その時期になると、もう貴族階級はD(注5)な意味でほとんどまったく生き延びるよすがもないような感じになります。文化的にいつても、武家の文化を頭に入れずには、なにもできなくなってくる。自分たちの未来がほとんどないということも分かっている、という時期です。したがって、公の場でみんなが共通して、ああ素晴らしいと言えるものを生み出す余地がなくなってくる。同時に、だれにも彼にも通じるような美的な物差しというものがなくなつた。ひとりひとり違う気持ちをみんなが持ちだした。つまり、分裂です。中世というものがはじまってきました。

言いかえると、歌人は公に向けて歌う必要がなくなってきた。宮廷社会そのものが、だんだん文化的にエネルギーが衰えてきて、ある人は素晴らしいけれどある人はまるで関心がない、ということでも詠むようになります。紀貫之の時代には、宮廷人たるものはすべて同じある美的な基準を認識(注5)していて、その上に立ってなにかをやらなければならなかった。定家の頃になると、それがもうなくなってきました。だから『新古今和歌集』(注5)というのは、最後の砦とりでだった。最後の堡壘ほうれいを築いて、ここに立て籠こもつた。それ以外のところにいる貴族たちは、文化的に言うともう落ちてしまっていた。だから、貴族階級最後のすごいエネルギーが結集したものが、『新古今和歌集』であるわけです。

それは言いかえると、美意識の上で誰も彼もに通じる美意識でないほうが良くなってきたということです。さらに言うと、自身みづかの心の奥底を探れば探るほど、それが新しさに通じてくる。それで生き延びていくわけです。つまり定家はそういう時代に棹さお差して、もっとも先端までその風潮を推し進めたということになります。つまり、晴れの舞台に向かないで褻けのほうを非常に重んじる歌風になっていく。だからこそ、余情妖艶と言えた。幽玄も同じことです。幽玄なものというのは、イメージで見て分かるもの

ではありません。そういうものではなくて、幽玄であるということは、その人その人によって感じ方が違ってしまふ。ある人にとってはとても幽玄な歌であるけれど、別の人にとってはなんでもないというものが出てくるわけです。だから、ひとつのものを見ても、その人自身の心の深さ浅さによってものの見方が変わってくる。つきつめれば、「私しかない」という意識でもある。

（大岡信『あなたに語る日本文学史』による）

〔注1〕 定家Ⅱ鎌倉時代初めの歌人、歌学者、古典学者。（二一六二―二二四二）

〔注2〕 紀貫之Ⅱ平安時代前期の歌人、歌学者。『古今和歌集』を撰進し、仮名序を執筆した。

〔注3〕 源実朝Ⅱ鎌倉幕府三代將軍。万葉調の歌を詠んだ。（二一九二―二二一九）

〔注4〕 紫式部とか清少納言とか和泉式部とか赤染衛門Ⅱ平安時代中期の歌人、作家たち。女房経験者。

〔注5〕 『新古今和歌集』Ⅱ鎌倉時代初期にできた勅撰和歌集。後鳥羽院歌壇の歌人のほとんどが編纂に関わった。

〔問一〕問七については、マークシートの所定の欄に記入しなさい。問八・問九については、記述式解答用紙の所定の欄に記入しなさい。〕

問一 Aに入る最も適当な言葉を次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|----|---|----|
| 1 | 相づち | 2 | 終止符 | 3 | 先手 | 4 | 批点 |
|---|-----|---|-----|---|----|---|----|

問二 ☐ B C Dに入る最も適当な言葉をそれぞれ次の中から選び、その番号をマークしなさい。(同じ番号を二度以上選ばないこと。)

- | | | | |
|-----|-----|-----|-----|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 歌論的 | 社交的 | 現実的 | 理想的 |

問三 傍線②「平安時代の歌のひとつの理想」とはどのようなものか、最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 ことばが暗示するものを巧みに活用して、こういう観点から作ったという趣向の見所があるもの
- 2 ことばが明示するものに依拠して、どの観点から作ったのかという趣向の見所を推察させるもの
- 3 ことばの表す意味範囲が極めて広く、趣向のおもしろみも広い範囲にわたり多く存在するもの
- 4 ことばの表す意味が明確で、趣向の立て方が巧みで全体から趣向のおもしろみが感じられるもの

問四 傍線③「新しい歌のスタイルの素晴らしさを鮮やかに示した」とあるが、どのような歌風を示したのか、最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 公に向けて明確に歌うことを目指す歌風
- 2 自身の心の奥底に探りあてたことを歌う歌風
- 3 見て分らない余情を人に分かるように歌う歌風
- 4 理論化した妖艶の美を共有できるように歌う歌風

問五 傍線⑧「幽玄」の説明として、最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

1 日本では非常に深くて暗いもののことを言ったのが、中国の影響を受けて意味が転じ、哲学的な奥深いことを言うようになった。

2 日本ではもともと哲学的な奥深いことを言ったのが、中国の影響を受けて意味が転じ、美学、美意識を言うようになった。

3 中国では哲学的な奥深いことを言ったのが、日本に取り入れた後に意味が転じ、美学、美意識を言うようになった。

4 中国では非常に深くて暗いもののことを言ったのが、日本に取り入れた後に意味が転じ、哲学的な奥深いことを言うようになった。

問六 傍線⑨「貫一的な歌というのは社交に非常に役に立つ」とあるが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

1 無記名でも作者が誰なのかということが明確に分かる歌こそ、社交の場における挨拶として最良の歌と価値づけられているから。

2 修辞のない平凡な歌を詠むことが、お互いの詠歌の能力を競い合うような緊張感を生むことなく、和気あいあいと交流できたから。

3 内容が明確に分かる歌を詠むことが、社交の場において参加者から歌への理解が得られ、歌を味わってもらうのに適していたから。

4 誰にでも作者が明確に分かる歌を詠むことが、貴族階級の閉鎖的な社交の場において心的結び付きを強める働きをしたから。

問七 本文の文体の説明として、**適当でないもの**を次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 文末に常体と敬体とを等間隔で交互に使い、読者が混乱を起こさない範囲でリズム感を出している。
- 2 「はっきりと」「ぴんと」などのオノマトペ由来の副詞を使い、難解な言い回しを抑え、読者の理解を促している。
- 3 「どういふことかという」とのような疑問文を取り立てて示す表現を使い、読者の興味を喚起している。
- 4 「つまり」「言いかえると」などの語句をよく使い、述べた内容をとりまとめて読者に示している。

問八 傍線⑩「定家の頃になると、それがもうなくなってきました」とあるが、「それ」はどのようなものを受けているか、十字以上十五字以内にまとめて書きなさい。(句読点、符号も字数に含める。)

問九 傍線①④⑤⑥⑦のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。文字は大きく鮮明に書きなさい。

